



家族集団の組織過程について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清野, きみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001331

家族集団の組織過程について

清 野 き み

北海道教育大学函館分校家庭学研究室

Kimi SEINO : On the Process in Which a Family is Organized as a Group

Summary

In the present thesis we grasp a "family" as a group and discuss the problem from the angle of mutual dependence between the variation of its external construction having an aspect of character toward society and its internal construction the primary object of which is the assignment of parts.

In other words, by observing farm villages in the suburbs we explain actual works or labours of the whole members of a family and the way of thinking about their living. To this end we make use of the Möbius's triangular diagrams.

Our results are summarized as follows : The process in which each family is organized has an inclination toward the "standard" of the family, through the division of works belonging to each family. Furthermore, the opposite direction is observed to be rare.

In view of the fact that the behaviours of the whole members in a family tend to watch the television only, studies in an advanced organization of each family group will belong to future problems.

I 研究の課題と方法

1. 研究の位置

今日の社会において家族のもつ意味の重要性は、一段と強調されている。家族の諸問題は、家庭生活を基底として論じられていることはいうまでもない。昭和28年から始まった大企業への設備投資が、昭和30年～33年頃より市場に影響を与え、家庭生活には、耐久消費材の普及による家事的生活時間の短縮というかたちで、あらわれてきた。また、昭和35年～38年には、世帯分離が促進され、小家族が多くなり、さらに職業をもつ主婦が多くみられるようになった。農業構造改善事業の進行と共に、農漁村においても、農業労働からの離脱人口が増加し、従来までの家庭生活は、さまざまな影響を受け、生活構造の上で、階層独自の特徴をもちながら変化しはじめてきている。こうした、家庭生活における外面構造の変化については、昭和38年、その大要を紀要に報告したが、その継続として、家庭生活の内面構造の変化を把握しようとした。特に昭和37年以来、家庭生活や

(1) 清野：労働の分化と家族の再結晶に関する研究，北海道学芸大学紀要第二部C，昭和38年12月，P22～37。

家族のもつ意味については、国の政策²⁾としては強く打ち出されてきたことも、この稿をまとめる動機になった。

家族の外内構造が、内面構造の変化にどのような、かかわりあいをもっているかを、研究の視点とした。外内構造は、家族集団のいわば、社会的性格の強い部分についてとりあげられる内容であり、内面構造は、日常の実践的立場が中心となり、家族関係の処理にあたるという、いってみれば微視的立場が強調される。本来家族集団は、日常の生活行動が基底になっているから、巨視的、微視的の二者択一ではなく、両者を正確に関連させながら、家族集団の特徴を把握しなければならないと考える。

家政学では、主体である家族と、客体である生活物資との関係を、生活行動を通して実証する立場をとる³⁾ものである。

家族集団を対象とする場合、家族の期待意識と役割分担行動に視点をおいてみることになる。いままで、家族集団の分析については、社会学、法律学、心理学の分野で扱われていた。家政学の立場での分析は極めて少ない。また、方法論の上でも確立していない。

ところで、こうした生活実態を対象とする場合に、方法論の上で注意しなければならない問題がある。それは、家族集団を変数として扱うことを前提にする、ということである。家族集団は、一つの社会集団とみなされ他の社会集団と本質的に異なる結合契機の特異性をあげて論じられるが結合契機の特異性は次のように考えられる。

家庭生活は、特定の男女の配偶によって独立世帯をつくり、その後、他の集団と異質の結合契機、即ち愛情を中核として家族が拡大されていくことを意味する。

しかし、この共同体の特異性が、以後の家族の生活実態に拡大され、家族集団内部の人的、物的機能を科学的に分析することを避けるかのような一面がみられた。結果的に家族集団を不変のものとする理論に通じる。家政学の分野において、生活主体である家族の研究がすすまないのは、こうした問題が含まれていたものと解する。無原則的拡大は、真の姿をわい曲する。家族を集団とみなすことは、群団でないことの意味がふくまれている。集団が結合契機の特異性をもちながら、組織のされ方によって、変っていくことを内包したことばである。したがって本稿では、家族集団を可変のものとして発想し研究をすすめる。

なお、実際の生活の中で生じてくる問題点を、特定の個人の態度として、その是非を問うのではなく、集団としての適応の段階でとりあげることもつけ加える。

以上の考慮の上で、家族集団の組織化について実証的接近を試み核家族のより一層の発展に寄与したいと考えたのである。

2. 研究の枠組と調査方法

家族内部の集団機能は、家族の相互関係を通じて現われる、したがって家族関係は、集団内部の組織過程の一つの側面を示すものとみることが出来る。

(2) 下記の報告資料にもとづいた。

- ① 中央児童福祉審議会答申「児童の健全育成と能力開発によってその資質の向上をはかる積極的対策に関する意見書」昭和37年7月33日。
 - ② 産業教育審議会建議「高等学校家庭科教育の振興策について」昭和37年11月13日。
 - ③ 政務次官会議「当面の青少年対策要項」の中の健全な家庭の建設の項、昭和38年7月11日。
 - ④ 中央児童福祉審議会、保育制度特別部会中間報告「保育問題をこう考える」昭和38年7月31日。
 - ⑤ 中央児童福祉審議会、家庭対策特別部会「家庭対策に関する中間報告」昭和38年8月9日。
 - ⑥ 昭和39年度、厚生省児童局を、児童家庭局に改称した。
- (3) 山本キク著：家政学原論、光生館、P38～39。第3章 家庭生活と環境、第1節 生活の主体と客体。
常見育男著：家政学・家庭管理学、光生館、P32。2 家政学の本質、(≡) 家政学の研究方法。

一般に、家族の組織過程の基本的要件を次のようにまとめる。

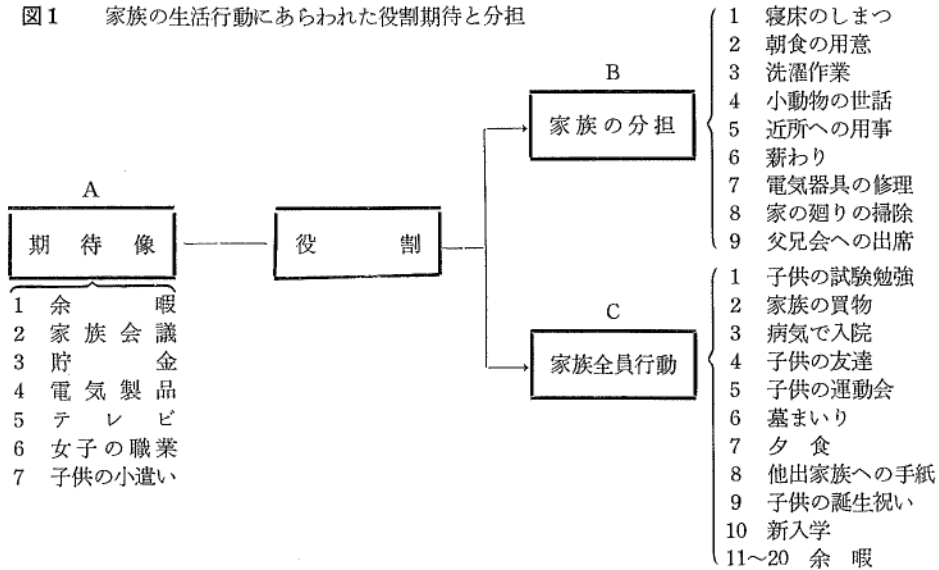
家族構成員が、生活課題や生活目的に対して、共同ないし統一の意識をもつことが出来るか、またそれらに対する態度の適応の状態はどうか、そして、生活組織における人的配置はどうなっているかが問題である。この基本的要件のうち、生活組織の人的配置は、しごとの分担、手つだい、協力などよく強調されているところであるが、他の二つの点は、殆ど家政学では明らかにされていないし、指摘もされていない。

いま、基本的要件を、家族集団の生活期待意識と、生活行動における役割分担の実状とにおきかえてみる。期待意識と、役割分担について、諸文献によれば両者の間にくいちがいがあった時、人間関係の葛藤の原因になりやすい⁴⁾と指摘されている。

核家族が提起されて20年の間に、家族に関する期待意識が変わった。民主的な原則を家庭生活の人間関係や生活行動の目標とする努力も続けられてきた。その具体的な生活へのあらわれが、個別的な家事生活行動を分担することにみられる。同時に家庭とは何かと、家庭生活を分析し、いかなる期待意識をもつべきか⁵⁾にもみられるような、本質的な模索も続けられているのである。この際、家庭内の役割分担が充分であると同時に、一步深く家庭の全員が、家庭を生活組織とし、男女の協力によって維持発展させようとする目的意識を強くもつべきである。核家族では、個々人の特性による役割分担が充分行き届いていると同時に、何らかの形で、その家庭なりの家族の共同意識と行動が創造されているべきである。その仮定にたって、図1のような図式が決定出来る。

即ち、家族の生活行動にあらわれた家庭の期待像Aに対し、実際の役割B、Cが対応する関係に

図1 家族の生活行動にあらわれた役割期待と分担



(4) 和田鶴藏著：家族関係要論，三和書房，P30。第三節 家族の構造（近代家族の内的構造），昭和37年。
津留 宏著：家族の心理，金子書房，昭和38年，第八章 1 家族関係の葛藤の性格，P138～150。
(5) 外崎光広著：家庭，高知市立市民図書館，I 混迷する家庭像，P11，III 資本主義社会と家庭，P164～173。
大熊信行著：家庭論，昭和38年，新樹社。
松原治郎著：現代の家族，昭和39年11月，日本経済新聞社，P13，2 家族とは何か。
大羽綾子著：変り行く婦人労働，昭和40年7月，東洋経済新報社，P162，第五章 これからの婦人労働。

位置づけられる。A, B, Cの内容は、その社会に普遍的かつ、地域的素材であることが必要である。ここでは、家族員が日常経験したり、何らかの経路で受容したりしたものを、内容としてとりあげ、これを調査の項目とする。これらがいかなる経路を通して受容されたかは問わない。ただ現代の家族がおよそ共通に直面していると推察されるものを取りあげる。また、地域、職業、階層によって若干の生活行動の相違が予測されるので、それぞれの考慮を加えることが大切である。

家庭生活行動にあらわれる期待像Aを、1.余暇、2.家族会議、3.貯金、4.電気製品、5.テレビ、6.女子の職業、7.子供の小づかい、の7項目とした。役割のうち、家族の分担はBとし、家族全員の行動によって役割を果たすものをCとした。Bには、1.寝床のしまつ、2.朝食の用意、3.洗濯作業、4.小動物の世話、5.近所への用事、6.薪わり、7.電気器具の修理、8.家の廻りの掃除、9.父兄会への出席、の内容をあげた。Cには、1.子供の試験勉強、2.家族の買物、3.病気で入院、4.子供の友達、5.子供の運動会、6.墓まいり、7.夕食、8.他出家族への手紙、9.子供の誕生祝い、10.新入学、11~20.余暇、の内容とする。

次に、考察の方法であるが、家庭生活は、具体的かつ実際のなものであるから、ある規定を定めれば、この規範の方向を意識し、期待することによって、集団全体はその方向へ動く。同時に設定された規範に対し、極めて積極的に逆の方向に動く場合もあり得る。この場合、家族関係に、逆の組織過程があらわれるであろう。この動態を明確にさせるための方法をみつけなければならぬ。試みとして三角図表を用いることにした。即ちある規範に対し、積極的に動く辺と逆の方向に積極性をもつ辺と、いづれにも属さないものの辺を組みあわせ、項目を位置づけてみようとした。

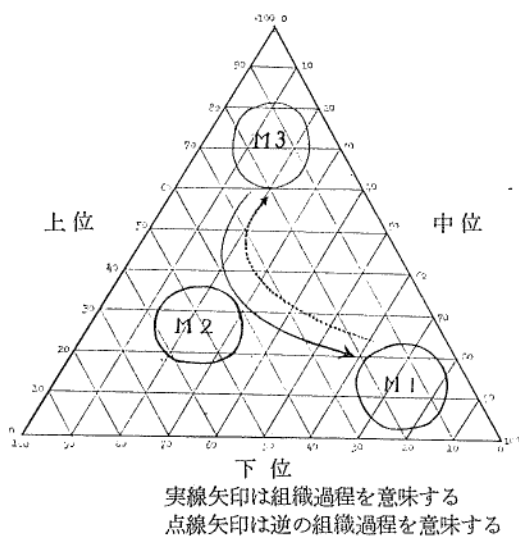


図2 予想される組織過程

このために、質問項目に5段階評価を与え、積極的要因をもつものを、5点と4点とし、逆に動く内容を2点、1点とした。どちらにも積極性を示さないものは3点とし、これを帯グラフに整理した。更に百分率におきかえ、三角図表上においてみる方法をとった。図表上では、底辺が0である。その頂点が100で、項目毎の百分率は、辺に対しての高さであらわされる。辺をそれぞれ、積極的にプラスの方向のものを上位、中間のものを中位、積極的マイナスのものを下位とすれば、望ましい規範へ家族集団の組織方向がむいている時は、図2のように、M1の位置が予想される。上位グループが多く、中位グループが少なく、下位の0の底辺に近い方がよい。

その他に、いくつかの組合せが考えられるので、もっともよいものM1、もっともわるいもの逆の組織過程M3、無関心中位グループの多いものは、M2のまわりになるとあらかじめ予想をし、考察を便利にした。

調査方法について

前述の仮説を実証するために、質問項目を作成した。調査用紙には、自分の家庭で、該当しているところに○印をつけさせるようにしたが、此の場合、比較的まとまりのある都市近郊農村を選ぶ

ことにした。調査地は、しばしば調査対象地⁶⁾としている、亀田町桔梗村字中の沢部落とした。ここは、終戦直後、兵役解除になった兵隊が、集団入植した戦後開拓地である。函館市からおおよそ、12.5 km 離れた半農半酪農部落で、ここの40戸の中、二世世代家族の主婦22名を対象とした。調査時における主婦の平均年齢は、29才である。戸別に面接調査をしたので、回収率は100%である。調査時期は昭和39年10月初旬である。

II 家族集団の組織過程の考察

1. 調査結果

家族の生活行動に関する考え方A1～7、家族員個人の役割分担B1～9、家族全員の行動C1～20までの各項目に対し、5段階にわたる質問の結果を整理したものが、表1a、b、cである。

生活行動評定表

表1-a A1～7

点縮左が実数、右が百分率

評定	項目		1		2		3		4		5		6		7	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
5	12	54.5	10	45.4	8	36.4	11	50.0	12	54.5	1	4.5	6	27.3		
4	5	22	5	22.7	0	0	0	0	3	13.6	7	31.9	3	13.6		
3	4	18.3	7	31.9	13	59.1	2	9.0	5	22.7	5	22.7	12	54.5		
2	1	4.5	0	0	1	4.5	9	40.9	1	4.5	7	31.9	1	4.5		
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4.5	2	9.0	0	0		

表1-b B1～9

評定	項目		1		2		3		4		5		6		7		8		9	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
5	4	18.3	5	22.7	4	18.3	2	9.0	0	0	1	4.5	2	9.0	6	27.3	0	0		
4	9	40.0	7	31.9	8	36.3	11	50.0	6	27.3	2	9.0	2	9.0	4	18.3	10	45.4		
3	8	36.3	10	45.4	8	36.3	7	31.9	11	50.0	17	77.3	11	50.0	5	22.7	11	50.0		
2	1	4.5	0	0	0	0	2	9.0	4	18.3	1	4.5	3	13.6	4	18.3	1	4.5		
1	0	0	0	0	2	9.0	0	0	1	4.5	1	4.5	4	18.3	3	13.6	0	0		

表1-c C1～10

評定	項目		1		2		3		4		5		6		7		8		9		10	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
5	6	27.2	1	4.5	13	59.1	5	22.7	2	9.0	4	18.3	0	0	7	31.9	8	36.3	9	40.0		
4	6	27.3	11	50.0	3	13.6	0	0	18	81.8	7	31.9	18	81.8	2	9.0	7	31.9	3	13.6		
3	8	36.4	6	27.3	6	27.3	7	31.9	2	9.0	8	36.4	4	18.3	9	40.9	5	22.7	10	45.4		
2	2	9.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	13.6	2	9.0	2	9.0
1	0	0	4	18.3	0	0	0	0	0	0	3	13.6	0	0	1	4.5	0	0	0	0		

表1-c C11～20

評定	項目		11		12		13		14		15		16		17		18		19		20	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
5	4	18.3	1	4.5	1	4.5	9	40.0	1	4.5	1	4.5	0	0	3	13.6	1	4.5	1	4.5		
4	5	22.7	1	4.5	2	9.0	7	31.9	0	0	2	9.0	0	0	0	0	1	4.5	1	4.5		
3	10	45.4	6	27.3	6	27.3	3	13.6	1	4.5	7	31.9	5	22.7	14	63.7	4	18.3	5	22.7		
2	1	4.5	3	13.6	4	18.3	3	13.6	8	36.3	2	9.0	5	22.7	2	9.0	4	18.3	2	9.0		
1	2	9.0	11	50.0	9	40.0	0	0	12	54.5	10	45.4	12	54.5	3	13.6	12	54.5	14	63.7		

(6) 昭和38、39年において、北海道学芸大学僻地教育研究所の研究費による調査で、黒崎・清野が調査対象地とした。

これをそれぞれ帯グラフにあらわしたものが、図3である。A、BよりもCの項目内容に行動

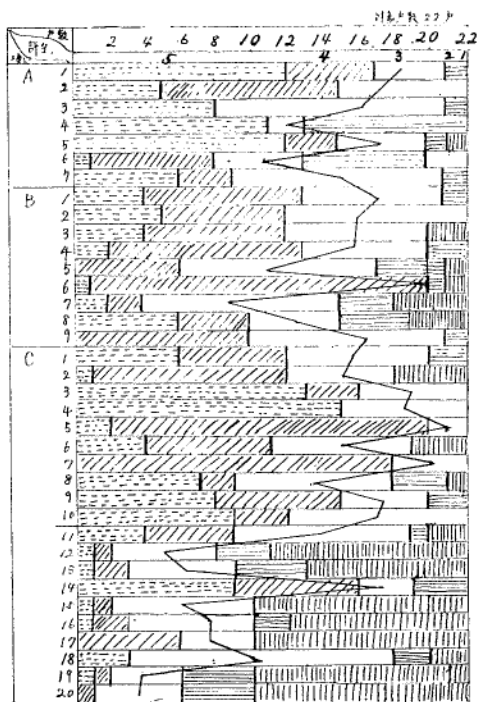


図3 家族の生活行動にあらわれた
役割期待と分担の帯グラフ

のムラがある。白い部分の評点を結んでみると、黒い折線のように平坦でない。即ち、項目毎に3の無関心グループの位置が変わり、生活行動に一貫した態度が見受けられないようである。

実際の生活では、生活行動に関する期待像と行動面が重なることが望ましい。そこで積極的意志の働く傾向の強いものが、評点5、4であったから、これをまとめて上位グループとし、消極的意志のもの、無関心のものは現状維持型とみて中位グループとした。また逆の方向に動くことが予測される評点2、1を、下位グループとして整理してみた。これが表2-a, b, cである。

以上の結果を、図4のように三角図表に位置づけて、A、B、C毎の、組織過程の内容をみることにする。

三角図表においては、それぞれの辺を、組織過程における上位、中位、下位としたから、図2のような予想の上でこれを考察する。

2. 考 察

家族の生活行動に対する考え方、規範は、積極的な生活意識として、M1のもの—1, 5, 2, M3のもの—4, 6, M2のもの—7, 3のように配列されよう。

生活行動上・中・下グループ別評定表

表2-a A1~7

項目		百分率						
グループ	項目	1	2	3	4	5	6	7
5 } 4 }	上	77.2	68.1	36.4	50.0	68.1	36.4	40.9
	3 中	18.3	31.9	59.1	9.0	22.7	22.7	54.5
2 } 1 }	下	4.5	0	4.5	40.0	9.0	40.9	4.5

表2-b B1~9

項目		百分率								
グループ	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
5 } 4 }	上	59.2	54.6	54.6	59.0	27.3	13.5	18.0	45.6	45.4
	3 中	36.3	45.4	36.3	31.9	50.0	77.3	50.0	22.7	50.0
2 } 1 }	下	4.5	0	9.0	9.0	22.8	9.0	31.9	31.9	4.5

表2-c C1~10

グループ	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
5 } 4 }	上	54.6	54.5	72.7	68.1	90.0	50.2	81.8	40.9	68.2	54.5
	中	36.4	27.3	27.3	31.9	9.0	36.3	18.3	40.9	22.7	45.4
2 } 1 }	下	9.0	18.3	0	0	0	13.6	0	18.1	9.0	0

表2-c C11~20

グループ	項目	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
5 } 4 }	上	40.0	9.0	13.5	72.8	4.5	13.5	0	13.6	9.0	4.5
	中	45.4	27.3	27.3	13.6	4.5	31.6	22.7	63.7	18.3	22.7
2 } 1 }	下	13.5	63.6	59.2	13.6	90.8	54.4	77.2	22.6	72.8	72.7

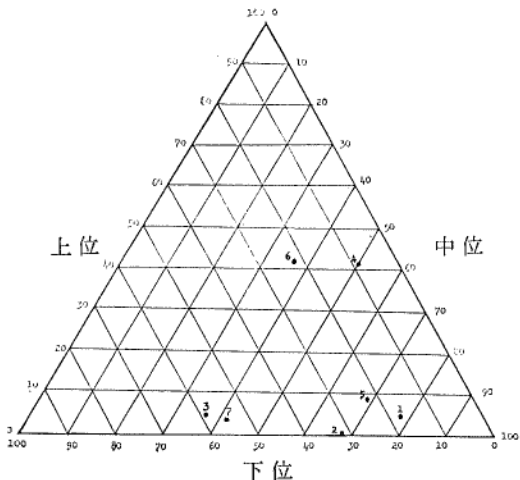


図4~1 組織過程 A

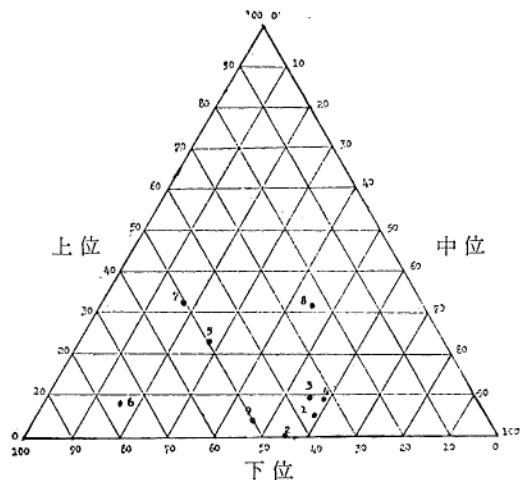


図4~2 組織過程 B

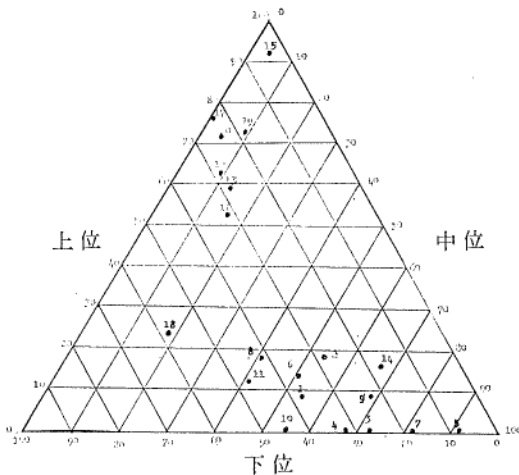


図4~3 組織過程 C

A 生活行動にあらわれた期待意識

(項目番号)

- | | | | |
|----|---|---|------------------|
| M1 | { | 1 | レクリエーションに対する考え方 |
| | | 5 | テレビ購入に対する考え方 |
| | | 2 | 家族会議の必要性に対する考え方 |
| M2 | { | 7 | 子供の小遣いの与え方 |
| | | 3 | 貯金に対する考え方 |
| M3 | { | 4 | 電気製品の購入にあらわれた考え方 |
| | | 6 | 女子の職業に関する考え方 |

Aに対する傾向をまとめてみると、レクリエーションは、精神的緊張をとき家庭生活を豊かにするために必要であり、家族全員、あるいは夫婦、祖父母、子供たちと世代別に別れて行なった方がよいとまとめられる。そのためにテレビを購入するとなっている。テレビは、家庭生活の娯楽や教養のためになり、家庭生活にプラスになると評価している。そして家族は、よく話しあうことが大切である。しかし、なかなか実行出来ないということも述べている。この三項目についてみれば、極めて積極的な期待意識をもってしているとみる。家庭電気製品や、女子の職業については、主として経済的なかねあいから述べられてきている。電気製品は家事労働を能率的にし、家庭生活を向上させるものだが、経済的な余裕がなければならぬし、女子が職業をもつことも、経済上の制約があって続けていても、余裕があったらやめたいというのである。貯金をすることや、子供に小遣いを与えることも同様、経済的に、思うように出来なかったり、その時その時に金額をきめてやる等、1, 5, 2の項目程、明確さが無い。

B 家族員個人の役割分担

(項目番号)

- | | | | |
|----|---|---|-------------|
| M1 | { | 2 | 朝食の準備 |
| | | 1 | 寝床のしまつ |
| | | 4 | 小動物の世話 |
| | | 3 | 洗濯作業 |
| | | 9 | 父兄会学校行事への参加 |
| M2 | { | 8 | 家屋近辺の掃除 |
| | | 5 | 近所への用事 |
| | | 7 | 電気器具の修理 |
| | { | 6 | 薪わり |

一般に家族が、家庭内においてそれぞれ役割を分担することは、家庭経営の上から、また個人の家庭内における地位の安定の上から、重要なことである。本稿では、誰が分担し、どのような役割期待を持っているかは問わず、家族内における作業分担の程度をみたものである。M1の、朝食準備や寝床のしまつ、小動物の世話、洗濯作業についての役割分担は、完全にきまっており、時に若干の担当変更がある程度である。学校行事の参加は母親が半数をしめ、他はきまっていないが、上位グループが多く、下位グループが非常に少ないので、M1としたものである。これらに対し、家屋近辺の掃除や、近所への用事など、やや公共的のひろがり要するものについては、大部分が分担を未分化のままにしている。また、電気器具の修理も同様に未分化である。この項目は、電気器具の普及度とも関連するし、知識の導入も平行されなければ、担当出来にくいものである。総じて、家事労働に属する役割分担は明確になりやすいが、生活圏が広がり、新しい知識をとまなうような

内容については、分担が不明確になるようであるといえよう。

次に、過去1年間にわたり、家族の全員が、Cの項目について、その役割期待にそむかないように共に行動をとった場合について調べた。C 11~20は余暇と考えられる内容である。A、Bと同様配列してみると、下記のようになる。

C 家族全員の役割行動

(項目番号)

- | | | | | | |
|----|----------------|----|-----------------|----|------------------------|
| M1 | } | 5 | 子供の運動会への参加 | | |
| | | 7 | 家族そろっての夕食 | | |
| | | 14 | 家族でテレビをみる | | |
| | | 3 | 家族の一員が、病気で入院した時 | | |
| | | 9 | 子供の誕生祝 | | |
| | | 4 | 子供の遊び友達の迎え方 | | |
| | | 2 | 買物のための外出 | | |
| | | 1 | 子供の試験勉強 | | |
| | | 10 | 子供の入学祝い | | |
| | | 12 | 墓参 | | |
| | | M2 | } | 8 | 家族の一員が他出したとき手紙を書いて慰さめる |
| | | | | 11 | 家族の好みの図書を購入する |
| 18 | 家族でトランプ、カルタをする | | | | |
| M3 | } | 15 | 家族で映画へ行く | | |
| | | 17 | 家族で釣りに行く | | |
| | | 19 | 家族で旅行をする | | |
| | | 20 | 家族で海へ泳ぎに行く | | |
| | | 12 | 家族でハイキングに行く | | |
| | | 13 | 家族で器楽演奏をする | | |
| | | 16 | 家族でバドミントンをする | | |

M1にあげたもののうち、子供の運動会へ家族そろって参加することは他の部落にもみられることで、部落の重要な行事になっていることがよくあらわれている。

家族が揃って夕食をとり、みんなでテレビをみる日常生活が図表にみられ、さらに大部分の家庭では、家族の一員が病気で入院したりすると手紙を書くなど慰安のための行動をとっている。子供の誕生祝いや入学祝いにも、50~60%の家庭が共に行動している。子供の試験勉強には、50%以上の家庭がこれに協力し、遊び友達も家族全員で迎えるなどの傾向がみられる。買物のために家族が一緒に出かける努力も見られる。M2では、8項目の、他出家族へ手紙を書くこと、11項目の家族の図書購入がM1に近いところにあり、18項目のトランプやカルタをみんなですするという位置とは離れている。トランプやカルタをするのは余暇=遊びの概念に入る内容であるとみているので、位置が変わってくるのではないか。M3では、行動が日常的でないことがわかる。設問内容が部分的であることもその理由であったかも知れない。総じて日常テレビをみることと、部落の年中行事である運動会に参加することと、そして子供中心の行動が約70%の家庭の特徴であることは、家族の全員行動の場がおおよそ同傾向であり、場面が限定されているとみられる。

本来、家族が独自の個性をもつことを望むなら、家族全員での行動形態の場面が細分化されているべきで現在のように、余暇行動がそのまま遊戯行動を意味するものであってはならないと考える

ものである。この意味からして、この部落は、生活向上を裏づける家庭の余暇行動が乏しいのではないかと推察される。この傾向はひとり当該部落のみではなく、全国の家庭にみられる傾向でもあろう。

III 要約と結び

家族集団を可変のものとして、現代の家族のもつ規範と実態から、主として役割行動を通して分析してみた。その中から家族集団の組織過程を推察したいと考えたのであるが、次のような点が得られた。

- ① 家族の全体的組織化は、家族個々人の役割行動を通してゆるやかに、男女協力してつくりあげる家族集団の方向に進んでいる。
- ② しかし、民主的な家族への期待の強さに比べて、家族全員が共同行動したり、意識的に組織していく生活行動が消極的である。
- ③ 核家族の規範に対して逆に組織されていく家族集団は少ないが、テレビを視る、部落の年中行事の運動会に参加する、子供の生活に協力する等、受容的要素が強く、個性的に家族全員の連帯感を高めるような積極性が少ないようである。

大部分の家庭の主婦が、本来の意味の核家族へ発展するためには、「家族全員のより以上の向上のための余暇が必要である」と認め、「家族を連帯づける家族会議の必要性と日常固定化」という期待意識をもっているが、実際行動ではそれが消極的にしかあらわれていない。また、余暇はテレビの視聴を意味し、全員行動もそれであるとしているが、テレビと視ている個人とは連らなるが、家族同志の連らなりはみられない。

余暇は、人間生活の向上、現在よりの進歩のために必須のものであるが、全国にみられる⁷⁾ように、余暇の形態にも階層差があり、低所得者層の者程、ぶらぶらしている余暇、テレビをみている余暇が多いものである。その原因はいろいろあろうが、高度成長政策による急激な家族の外面的変化の影響が一番大きい⁸⁾。そして内面的構造の側からみれば、自分の家庭を健全に、集団として発展させようとする意欲の弱さにもあると考える。仕事の分担のみにとどめてはならない。家族集団は自らの手で創造していくものであるから、外部からの干渉、まして、権力の干渉は排除されるべきである、此の意味で国家や政府機関が家族集団を組織すべきではない。

以上の前提にたつ時、家族員を適正に生活組織に位置づけ、これを評価し、家族の生活意識の統一や共同をめざしていく力を身につけたいと願うものである。いってみれば核家族における妻は、家事担当者よりも、家族を組織していく組織者であることが大切であろう。

今までつくりあげてきた各自の役割分担を中心に据えながら、さらに家族全員に共通な問題意識を育てあげる資料にと考えた。

最後に、この種の問題に新しい試みとして三角図表を使い仮説を実証する方法をとった。よく消化されていない部分もあるように考えられるので、御批判を頂きたいと願うものである。

昭和39年4月10日

- (7) 生活科学調査会編：余暇—日本人の生活思想、医歯薬出版株式会社、昭和36年12月、家族の変化と余暇（原茂男）、P95、個人の中の余暇（吉田光）、P113。
日本放送協会放送文化研究所編：国民生活時間調査、昭和38年9月、3 日本人の余暇とマスコミ、(1) 余暇行動の意味するもの、P251。
- (8) 清野きみ：労働の分化と家族の再結晶に関する研究、北海道学芸大学紀要第二部C、昭和38年12月、P28。
- (9) 家庭科教育、第39巻第6号、現代の家庭と家族関係、現代の家庭と家族参照、昭和40年5月、家政教育社。

別 表 (調査項目)

A-1

- (1) 家族のレクリエーションは精神的緊張をほぐしたり、家庭生活に楽しみや豊かさを増す等、その他種々の良さを生かして家族全員で参加する必要がある。
- (2) 家族のレクリエーションは必要であるが、親子、夫婦、兄弟姉妹、祖母など年令別にしたほうがよい。
- (3) 家族のレクリエーションについてはあまり関心がない。
- (4) 家族のレクリエーションは時間的に余裕のある人に必要なもので忙しい人には必要ない。
- (5) 家族のレクリエーションは怠惰のあらわれであるから全く必要がない。

A-2

- (1) 家族会議は家族員相互の人格を認めあいながら家庭生活を向上させるために必要である。
- (2) 家族会議の必要を認めるが平常は思うように実行出来ない。
- (3) 家族会議のことはあまりに考えたことがない。重大な事が起きた時にひらきたい。
- (4) 家庭の経営については夫婦や祖父母で決めて行くから家族会議はしない。
- (5) 家族会議はめんどろだ。

A-3

- (1) 貯金は合理的な家庭生活の計画をした上で積み立てていくべきである。
- (2) 貯金は賞与その他の臨時収入のある時にする。
- (3) 貯金は出来るだけ計画にそってすべきだが、なかなか出来ない。
- (4) 貯金は、生活の残りです。
- (5) 貯金は全くする必要がない。

A-4

- (1) 電気釜、電気掃除機、洗濯機などの電気製品は家事作業を能率的にし、主婦の生活、家庭生活を向上させるものだから購入した。
- (2) 経済的に余裕があったので購入した。
- (3) 何となく購入した。
- (4) 経済的に余裕が出来たら購入したい。
- (5) 電気製品は主婦や家族のものを怠けさせるから購入する必要がない。

A-5

- (1) テレビは家庭生活の娯楽や教養として必要なので購入した。
- (2) テレビがあると良い面があるだろうと思い又経済的にも余裕があったので購入した。
- (3) 何となく買った。
- (4) テレビは悪影響を与えるし経済的にも余裕がないので購入しない。
- (5) テレビは家庭生活に害を与えるから購入しない。

A-6

- (1) 今後女子も男子と同じく経済的独立や社会的地位を求めて職場に進出し結婚後も共稼ぎをするべきである。
- (2) 結婚後もなるべく職場に進出すべきだ。
- (3) 出来たら職場に出た方がよい。
- (4) 女子が職場に出るのは経済的困難な時であり、夫が適当な収入を得る間は職場に出る必要はない。
- (5) 女子の仕事は、家事、育児のみであって職場に出るべきではない。

A-7

- (1) 金銭を計画的に使用したり、家庭生活の内容を理解させるために子供たちに小さい時から計画的に一定の額の小づかいを与えるべきだ。
- (2) 小づかいは子供が要求する頃より与える。
- (3) 小づかいは、その時その時に与える。
- (4) 小づかいは生活の楽な時に与え、苦しい時には与えなくともよい。

- (5) 子供には与えるべきでない。

B-1

- (1) 寝床を仕まつする人は決まっております完全に果たされている。
(2) 寝床を仕まつする人は殆どきまっているが時に変わる。
(3) 大体きまっている。
(4) 仕まつをする人が殆どきまっていない。
(5) 全然きまっていないしかまわないでよく。

B-2

- (1) 朝食の用意をする人はきちんときめられ役割りを果たしている。
(2) 朝食の用意をする人は殆どきまっていて時に変更することがある。
(3) 大体きまっている。
(4) 殆どきまっていない。
(5) 全くきまっていない。

B-3

- (1) 洗濯をする人は決まっておりますきちんとしている。
(2) 洗濯をする人は殆ど決まっている。
(3) その時によって洗濯をする。
(4) 洗濯をする人は殆どきまっていない。
(5) 全くきまっていない。

B-4

- (1) 家で飼っている犬猫鳥その他の動物の世話をする人はきちんときまっている。
(2) 大体きまっている。
(3) その時によって世話をする人がちがう。
(4) 殆どきまっていない。
(5) 全くきまっていないしする必要がない。

B-5

- (1) 近所へのかんたんな用事をする人はきまっております完全に果たしている。
(2) 大体きまっておりますよくしている。
(3) その時によってきめる。
(4) ほとんどきまっていない。
(5) 全くきまっていないしかまわないでよく。

B-6

- (1) 薪わりをする人はきまっております完全になされている。
(2) 薪わりをする人はきまっているが時に変更がある。
(3) 大体きまっている。
(4) ほとんどきまっていない。
(5) 全くきまっていないし薪わりはしない。

B-7

- (1) 電気器具の修理をする人はきまっておりますきちんと仕事をする。
(2) ほとんどきまっているが時に変更する。
(3) 大体きまっている。
(4) ほとんどきまらない。
(5) 全く出来ないしする必要がない。

B-8

- (1) 屋内、近辺の掃除をする人はきまっておりますきちんと掃除をする。

- (2) ほとんどきまっているが時に変更する。
- (3) 大体きまっている。
- (4) ほとんどきまっていないがその時によって都合のよい人が掃除する。
- (5) 全くきまっていないし掃除をうるさくいうことはない。

B-9

- (1) 父兄会学校の行事に出席する人がきまっております完全に果たしている。
- (2) ほとんどきまっている。
- (3) 大体母親である。
- (4) ほとんどきまっていない。
- (5) 全くきまっていないし行く必要がない。

C-1

- (1) 子供が試験勉強をする時家族全員が静かにテレビその他の雑音は一切避けるようにする。
- (2) なるべく静かにする。
- (3) なるべく静かになるようにする。
- (4) 特別静かにしない。
- (5) 騒音激しくてもそのままにしておく。

C-2

- (1) 日曜日祭日などを利用し家族そろって買物に行く。
- (2) 時々そろって出かけることがある。
- (3) 都合のよい人と出かける。
- (4) 誰も一緒に行く人がない。
- (5) 家族そろって行ったことがないし行く必要がない。

C-3

- (1) 家族の一員が入院すると全員が時間をみつけ、たびたび見舞に行く。
- (2) 何人かで見舞に行く。
- (3) それぞれが見舞に行く。
- (4) ほとんど見舞に行くことがない。
- (5) 誰も行かないようにしている。

C-4

- (1) 子供の友達が遊びにきた時家族全員で歓迎する
- (2) 友達を知っている家族だけで歓迎する。
- (3) 友達を家族に会わせてから遊ぶ。
- (4) 友達が来ても家族に会わせない。
- (5) 友達が来ても全然知らせない。

C-5

- (1) 子供の運動会にはどんなことがあっても家族そろって行く。
- (2) 急な用事がない限り行く。
- (3) 時間の余裕のある人が行く。
- (4) 行ったり行かなかったりする。
- (5) 家族そろって行く必要がない。

C-6

- (1) 家族そろって年に一度必ず墓まいりに行く。
- (2) 急な用事のある人や忙しい人を残し大体行く。
- (3) 墓まいりに行きたい人で行く。
- (4) 行ったり行かなかったりする。

家族集団の組織過程について

- (5) 家族で行く必要がない。

C-7

- (1) どんなことがあっても夕食は家族そろってから始める。
- (2) 大体家族がそろってとるようにしている。
- (3) 都合が揃ったら夕食を一緒にする。
- (4) 夕食を共にすることを好まぬ人が多いので一緒に食べることがない。
- (5) 家族そろって夕食を食べることがない。

C-8

- (1) 家族の一員が、他出した場合家族全員で手紙を出しあい励ましたり慰さめたりする。
- (2) 大体家族全員が手紙を出すようにしている。
- (3) 母親だけが書く。
- (4) 大体出さない。
- (5) 他出家族には手紙を出さなくてよい。

C-9

- (1) 家族全員で誕生祝いをする。
- (2) 大体全員で誕生祝いをする。
- (3) 都合のよい時に誕生祝いをする。
- (4) 家族全員では祝ってやらないが時々贈物をする。
- (5) 家族全員でしたことがない。

C-10

- (1) 子供が学校に入学した時家族全部で必ず祝う。
- (2) 大体家族全員で祝う。
- (3) 何人かで入学祝いをする。
- (4) 家族全員では入学祝いをしない。
- (5) 入学祝いは家族全員でしなくてよい。

C-11~20

各項目共次のような程度で作成した。

- (1) 必ず家族全員で行動する。
 - (2) 大体家族全員で行動する。
 - (3) 家族全員で行動するのは稀である。
 - (4) 家族全員で行動しない。
 - (5) 家族全員では必要ない。
- C-11~20までは余暇に関する事で本文でもふれているのでこれを省略する。